

芝居 人形 小兎とライオン (四幕)

千葉女師附屬幼稚園保母 山 川 幸 枝

第一幕 場所 小兎の家

時 初夏の朝

登場者 小兎、母兎

舞臺 下手に深き木立、舞臺中央より上手に小兎の家あり。

障子を少し開きて母兎が寝てゐる。枕もとに藥ビン等置きてあり。

何處からか鶯の聲が聞えて開幕。母兎目覺めて呼ぶ。

母「うさちやん、あや、うさちやんはどこへ行つたのかしら？——うさちやん(靜かに低く)ほんとにどこへ行つたのかしら……」

やがて歌聲(適宜)とともに下手木立の方より小兎登場。キャベツを入れた籠を持つてゐる。家に近づくと歌をやめてそつと中をのぞき込む。

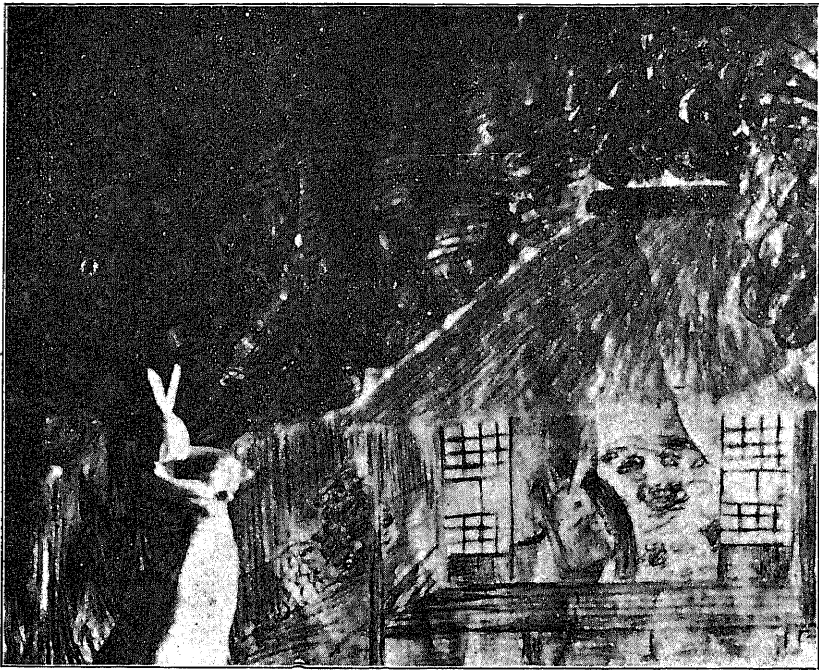
小「やア、お母さんもうお目覺め？ 僕ずゐ分早いでしょ、こんなにたくさんキャベツを取つて來ましたよ、ほーら、ネ！」

云ひながら母兎に近寄り籠を置く。

母「まあまあ、あいしさうなこと！ これにずゐ分澤山ねえ」

小「えい、それは僕一生懸命で取つたんですもの——あの——それからねえお母さん、鳥で雀さんに聞いたのですけれどお山のいちごがもう真紅になつてそれはそれはあいしいのですつて、僕これから行つてとつて來てもいゝでせう？」

母「さうぬえ？——でもお山の奥には怖いライオン



ンや、虎が居るからよく氣をつけて行くのですよ！
そしてなるべく早く歸つてゐらつしやいネ、よござんすか？」

小「え、大丈夫！ 僕は馳るのがとても早いんだからすぐに歸つて來ますよ、ぢやち母さん、行つてまゐります。」

母「あ、行つてらつしやい。氣をつけてね——」

小兎いそ〜として退場。——幕——

第二幕 場所 森の中

時 朝

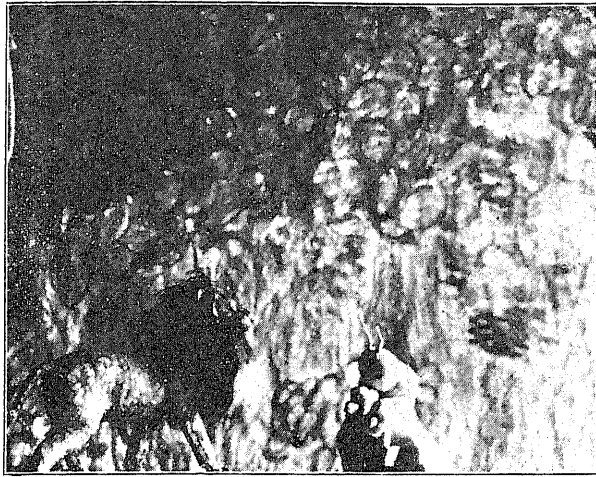
登場者 小兎、ライオン

舞臺 生ひ茂る樹々の根もとに雑草にまじつて眞紅のいちごが所々に見える、森の奥深き感じ。

幕開くと小兎上手より元氣よく登場、いちごを入れた籠をさげてゐる。中央に立どまりそれをのぞき込みつゝホツとした様な氣持で云ふ。

小「あ、くたびれた！ あんまり一生懸命で

とつたものだからすつかりつかれちやつた。だけ
どずぬ分ちいしさうないちごだなあ!! そうそ——



早く歸つてお母さんに差上げよう」

勢よく二三歩行つて急に立ち止まる。

小「おやッ!？」

下手よりライオン大威りで出て来て小兎に近づく小兎思はず
後退りして怖しさうにうづくまる。

ラ「兎吉、お前の家ではなぜ此の頃わしの所へあ
いしいものを持つて来ないのだ、今日はお腹がす
いてたまらないからお前を頭からたべて了つてや
る!」

小兎早口に充分の怖れを含んでもりながら、

小「あッ! ライオンさん、ちよちよつと、待つ
て下さい。僕いそがしいもんだから——あのお母
さんが御病氣なものだからつい何にも持つて行け
なかつたんです、けれど今日はきつと何かあいい
いものをさがして持つて行きますから、どうぞ僕
をたべないでかんにんして下さい。ネッ ライオ
ンさん、お願ひです!!」

ライオン「寸考へてから云ふ。

ラ「よろしい、ではまつてやらう、そのかはり晩

までに持つて来ないとこん度こそはどうしてもお前の事をたべて了ふぞ! いゝか?

小「はい、きつと持つてまゐります」

ライオン更に大威りで上手森の中に退場。

小兎その後を見送つてホツとしながら、

小「あゝよかつた! もう少しでたべられて了ふ所だつたでもあんな約束をして了つたから晩までに何かおいしいものを見つけてはならないし——そうだ、お母さんが心配なさるといけないから早くかへつていちごをさしあげてから又さがしにやつて来よう。」

いそいで下手に退場。

舞臺暫く空、その間に鳥の聲など聞えて時間経過し次第に薄ぐらくなる、と一息がしつかれた元氣のない小兎登場、考へ込みつゝ舞臺を左右する。

小「あゝア、困つたなあ!! 一日森の中をさがしたのに何にも見つからないんだもの。だけどライオンの所へ持つて行くものがなければ僕がかはり

にたべられて了はなければならぬし——僕がたべられて了つたらお母さんはどうなさるだらう。あゝア、何かいゝ考はないかしら」

やがてふと何かに思ひ到つて手を打つと元氣に叫ぶ。

小「あツ、さうだ!! 物知りのみゝづくのお小父さんに聞いて見よう。何にかいゝ考を教へてくれるかもしれない。さうださうだ!!」

急いで上手に退場。

——幕——

第三幕 場 所 みゝづくの家

時 夕方

登場者 小兎、みゝづく

舞臺 密生した大木をくりぬき綴りあはせた家みゝづくその中央の椅子に倚り所在なげに煙管をもてあそんでゐる。その傍には開かれた本、枕木鉢など適宜におかれ下手に入口上手に次の部屋に通ずる扉が半ば開かれてゐる。

カア〜とねぐらさし行く鳥の聲と共に開幕。

ミ「オヤ〜、大分鳥が啼いて行くな——もう夕方になつたと見える。今日は朝から誰も遊びに来

なかつたが——あゝア(あくび)」

この時下手入口の扉に小兎おとなふ。



小「今日は——小火さんこんにちは」

ミ「オヤ、誰か来た様だな(獨言の調子にて低く)お入り——」

小兎みづくに近づいて一體。

小「小父さん、御機嫌よう」

ミ「あゝ、誰かと思つたら兎吉君ぢやないか!

よく来たねえ、さあもつとこつちへお出で、お母さんの御病氣はどんな風だネ?」

小「えゝ、ありがたう、もうずつといゝのですけれど——」

兎吉始終浮かぬ面持。

ミ「ほう、それは結構——」

ふと沈んでゐる兎吉に氣づいた様に、

ミ「だが今日は又ばかに心配さうな顔をしてる様だがどうしたの? お母さんにも叱られたの?」

小「いゝえ、小父さん、そんな事ではないんです今日僕、ほんとうに困つたことが出来ちやつたんで小父さんに何かいゝ考を教へていたゞかうと思つて来たのですけれど……」

ミ「困つた事つて? 一體どんな事なのだい?

小父さんも一緒に考へて上げるからまあ話してごらん。」

兎吉少し早口に語る。

小「小父さんも、そらあの山奥の意地悪なライオンの事を知つてゐるでせう？」

ミ「あゝ、あの力持ちのライオンの事だらう？」

小「えゝ、さうです、そのライオンにねえ、僕、

けさお山で出あつて了つたんです。そしたらもう

とても恐しい顔をして僕をたべて了ふと云ふんで

せう——ぼく怖くてぶる／＼ふるへちやつたけれ

どでも一生懸命あやまつたんです。そしたら夕方

までにおいしい物を持つて来るなら許してやると

云つてやつとかんにんしてくれた所ですけれど。

それからいくらお山をさがしたつて何にも見つか

らないのですもの、だけど何にもなければ僕が約

束通りたべられて了はなければならぬし——ね

え、小父さん 僕どうしたらいいでせう!!」

ミ「ほウ、それは怖かつたらう。だけどその位何でもないさ、小父さんがいゝ事を教へて上げるからもつとこつちへお出で」

兎吉近より小首を傾けて時々うなづきつゝ聞く。

ミ「ねツ、ほらたくさんおいしい物を持つて來ようと思つたらお隣りの森のライオンにみんなとられて了ひました。つて云へばライオンがきつと怒るだらう!? そこを上手にあの池の所までつれて行くのさ、そしてネ——ホラ……わかつたらう？」

兎吉元氣よく、

小「えゝ! わかりました、ぢや小父さん僕さつた上手にやりますよ!! ありがたう、どうもありがたう、あゝ面白いなあ! では又來ます、小父さん、さようなら——」

ミ「さよなら、又あいで」

兎吉元氣に出て行く。みづく見送りながらつぶやく。

ミ「面白い、面白い! だが兎吉が上手にやつて

くれるといしが……」

第四幕 場所 池のほとり

時 夕刻

登場者 小兎、ライオン

舞臺 鬱蒼たる木立の影をうろこして暗く深く淀んだ青黒い池
水が下方に見ゆる所、池をめぐる樹々の根を危んで雑草が
高々と生ひ茂つてゐる。

幕開くとやがて木の間から話し聲が聲えて来る。

ラ「あいつ、その隣の森のライオンの居る所はま
だなかなかかい？」

小「いゝえ、もうすぐそこなんです」

ライオンいらくした調子で、

ラ「他の御馳走を横取りするなんて悪い奴だ、見
つけ次第一かみにたべて了ふから——」

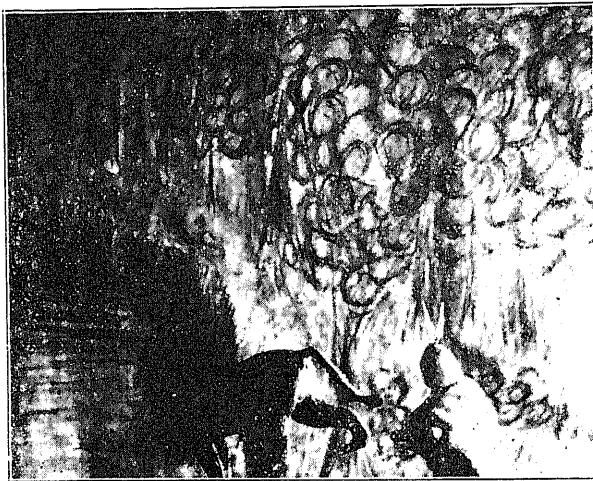
ライオンと小兎登場、池の岸に立どまり下の方をのぞきこみ
ながら、

小「ホラ、ライオンさん、あそこでですよ、あの下
の方に怖い顔をしたライオンが貴君をにらんでゐ
るでせう」

ラ「どれく、どこにだ？」

同じくのぞく。

ラ「ウオ——ツ!!」怖しい聲で吠えんと身をおど



らして池の中へ飛び込む。

小兎呆然として

—幕—

Hegro. (♩ = 120)

First system of musical notation, measures 1-4. The piece is in 2/4 time with a key signature of one sharp (F#). The right hand plays a melodic line with eighth notes, and the left hand provides harmonic support with chords and single notes. Measure numbers 2, 3, and 4 are indicated below the bass staff.

Second system of musical notation, measures 5-8. The right hand continues the melodic line, and the left hand plays chords and moving lines. Measure numbers 5, 6, 7, and 8 are indicated below the bass staff.

Third system of musical notation, measures 9-12. The right hand plays a melodic line with eighth notes, and the left hand provides harmonic support. Measure numbers 9, 10, 11, and 12 are indicated below the bass staff.

Fourth system of musical notation, measures 13-16. The right hand continues the melodic line, and the left hand plays chords and moving lines. Measure numbers 13, 14, 15, and 16 are indicated below the bass staff.